宇田川準譯

小學讀本

三

特3号
980

大日本教育會書籍館
二 二 函
二 四 架
四 號
冊

六 函
館
架
號

宇田川準一 譯
小笠原東陽 校

小學讀本

卷三

文學社藏版章

文學社刊行

小學讀本卷之三

宇田川準一 譯
小笠原東陽 校

第五課

第一

此女兒は、愛らしき人形と、鞠を持てり、○汝は、此二つを好めりや、○人形を扱ふには、常に、善く心を用ふべ

宇田川準一 譯
小笠原東陽 校

小學讀本

巻三

文學社藏版章

文學社刊行

小學讀本巻之三

宇田川準一 譯
小笠原東陽 校

第五課

第一

北女兒は、愛らしき人形と、鞠を持てり、○汝は、此二つを好めりや、○人形を扱ふは、常に、善く心を用ふべ

小○汝は、鞠を、つくことを、得るや、○若し、鞠を速くつかんと欲せば、汝も亦、これに隨ひて、手を速く動かさゞることを、得ざるなり、

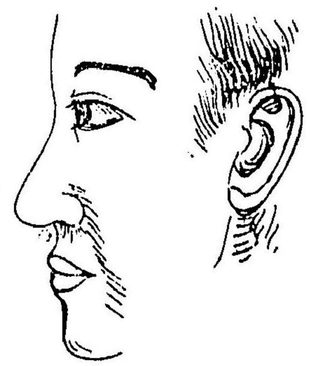
第二

汝、彼女子は、此童子を愛をると、思ふや、○此童子は、彼女子を愛するや、○汝は、此童子の、愛らしき圓き顏を、見たりや、○女子は、童子

を愛し、童子は、女子を愛をると思ふ、○此童子は、愛らしき顏なり、○其頭髮は、長くして、垂れ下りさり、○其足は、裸あれども、時候、暖なるゆゑに、凍らず、○汝も、此童子の名を、知れりや、○吾は、其名を知らざるあり、

第三

爰に鼻耳、口及び眼を示せる圖あり、○鼻は、物を嗅ぎ、耳は、物を聞き、口は、物を味ひ、又談話を爲し、眼は、物を見る爲めの、道具あり、○



我等は皆、一つの鼻と、一つの口と、二つの眼と、二つの耳とを持てり、○我等は、一つの口と、二つの眼と、耳とを、持てるに由り、假令、多く見聞くと雖も、口は、よく慎みて、多く語るべからず、

第四

爰に、手腕足及び長靴、短靴あり、○我等は、二つの手と、二つの腕と、二つの足とを持てり、○

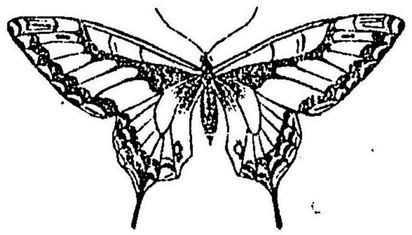
○此二様の靴は、足に穿くものなり、○汝は、長靴を持てる手を見さりや、○それは、男子の手ぶりや、○此腕の大ぶるを見よ、○我等は、片足を以て、兩足にて歩める如く、多く歩み、又、片手を以て、兩手を用ひる時の如く、能く働くことを、得るや、○否、兩なごら、決して、能

はゞるゝ、

第五

汝等、吾の側らに來りて、各其見得る所のものを、語るべし、○一人の童子は、山河舟家、及び馬を見ると云ひ、又、一人の童子は、此五つの者の外に、樹溪橋牛、及び廣野を見ると云ふ、○吾は、汝等二人の、見得る者の外、彼樹上に、白き鳥の、止るを見、又、遠き所よ、農夫の耕やすを見るなり、

第六



これは、蝶なりや、又、蜻蛉なりや、○それハ、蜻蛉よあらぞ、て、蝶なり、○若し、これを捕へんとすれバ、其蝶は、如何をるや、○汝の、手を出だすを見れバ、

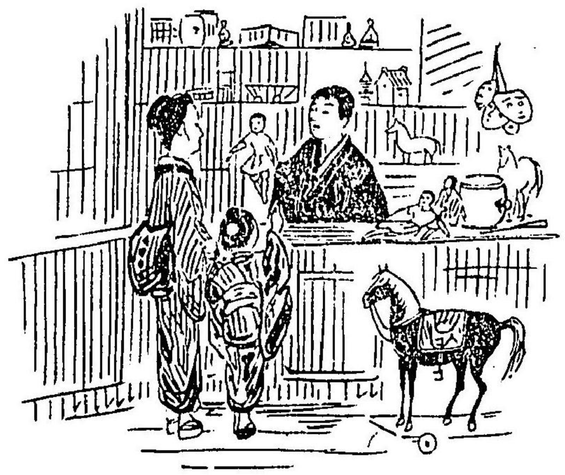
忽ち飛びて、逃げ去るべし、○蝶に、鳥の如く、大なるものありや、○蝶に、小なるものと、大ふるものとありれども、鳥の如く大ふるもの、あらじ、

第七

爰に、樹の枝に、止りたる鳥あり、○此鳥の名は、何と謂ふや、○此鳥は、梟なりや、○然り、梟は、終日、茂りたる、老樹の上に、居れども、日暮るれば、飛び出づるものなり、○梟は、大なる、圓き眼あり、○然れども、晝は、物を見ること、能はざる故、夜よ至りて、餌を索むるなり、

第八

此女兒は、母と共に、玩物店に至れり、○母は、女兒に向ひて曰ふ、汝は、何を買ふことを願ふや、人形なりや、又鞠なりやと、○吾は、其二つを願へ、ども、最も、人形を好めり、○然らば、



汝の爲めに、其二つを買ふゆへに、善く心を用ひて、毀つことなかれ、○此女兒は、人形と、鞠とを持ち、喜びて、家に歸れり、

第九

馬に乘れる人を見よ、○此馬は、速く走れる狀なり、○汝は、馬に乘りて、彼の如く、速く走らせることを、好めりや、○吾は、馬に乘ることを、好めども、速く走らせずして、徐かに、歩ませることを、好めり、○此馬は、何の爲めに、速く、走れるや、○彼は、走らせることを、好みて、馬を、鞭うてりや、○彼は、速く走らせることを、好めども、馬を、鞭うつことなし、○

汝は、彼の回顧せるを、見さりや、○吾は、之を、見たれども、其何故なることを、知らざるあり、

第十

爰に三人あり、○其内の一人は、左の手に、帽と、杖とを持てり、○彼の眼は、圓く大ふして、腮は、甚ざ肥たり、○彼の髪の、長くして、頸の處より垂れ下る

を見よ、○彼は、長くして、温ふる上衣を、着せり、○彼は、唯今、寒き所より入り來りたるふり、○帽を冠りたる人は、上衣を、着ざるのみならず、腕を露はせり、○彼の働ける室内は、暖ふればなり、○彼は、他より來りたる人に、其談を聞くことを、樂めり、○又、其側らに、立ちたる童子は、此二人の談を、聽聞せるなり、

第十一

此人等は、草を苅れり、○此草の、乾きさるも

のを乾草と云ふ、○草の枯れたるときは、速よ、車に載せ、馬に牽かせて、小屋ふ運ひ入るべし、○若し雨降れば、再び濕るればふり、○此乾草は、牛馬等の食物なり、○馬は乾草、及び穀物の中、何を最も好めりや、○馬は、最も燕麥を好めり、○牛も亦、燕麥を好めり、○然り、○羊は、燕麥を好まざるや、○否、羊も亦之を好めり、

第六課

第一

汝少年、岸より遠く、水中よ、行くことなかれ、○汝は、水中よ入りて、何を取らんと、思ふや、○我は、美しき蓮の花と、其大なる葉とを、取ら

んと思ふ、○これを取ることも、宜しけれとも、能く心を用ひて、遠く行くへからぬ、○誤りて、深き處に、陷ることあれバなり、

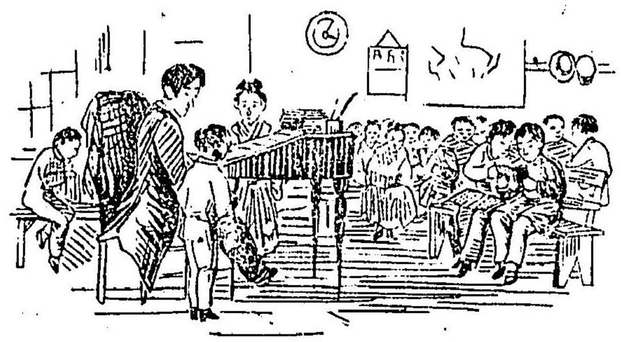
第二

鵠ハ、大なる鳥なり、○此鳥の雛の間ハ、其羽、皆鼠色なれども、生長するときは、雪の如き、白色となる、○此鳥ハ、頸長くして、脛短し、○此鳥も、木の葉、小枝、又は草を集めて、巣を造る、其卵ハ、白くして大ふり、○汝等ハ、此鳥を、

見たることありや、○否、我ハ、一度も、見さることなし、○此鳥も、如何なる處に、棲めるや、○此鳥も、大抵、水上に浮游し、又は、空中を、飛ひ翔るものなり、

第三

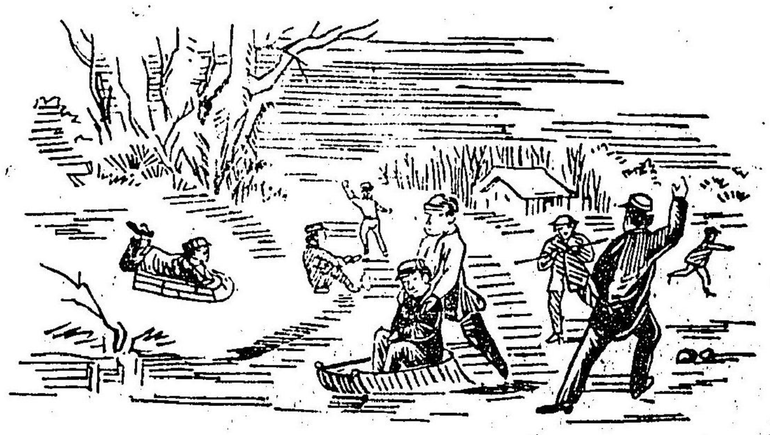
此數多の童子等は、皆其日課を、脩めんが爲めに、學校に來れり、○此學校には、石盤し、地



圖と書物とあり、○汝等は、學校よ行くことを、好むや、○汝等ハ、書物を好ミ、又語を綴ることを得るや、○吾は、汝等の、好みて學校よ行き、勉めて、其日課を學ばんことを、欲そるなり、

第四

今日ハ甚ど寒き日よりして、地面は固より、樹上、又池上よも雪積れり、○童子等は、橇よ乗りて、氷雪の上を、滑り行くことを、好めり、○此遊を爲そに、よく心を用ひざれば、その上に倒れて、傷を受くることあるべし、○汝ハ、童子の、橇よ乗りて、坂を滑り下るを、見たりや、○汝ハ、橇よ乗りさる小女を、童子の



推し行くを、見さりや、○此遊を爲るには、互に心を用ひて、親切を盡すべし、

第五

此童子は、巣の中に、卵の在るを見出したり、○これは、雞の卵なれども、其雞は、今他所に、行きさるなり、○鴨又は鵝も、卵を生めども、其味は雞の卵より、旨からず、○鳥の巣を造るに種々ありて、樹

上に造るものと、地面に造るものとあり、又草にて造り、藁にて造り、木の葉、或は、小枝にて造るものあり、○凡そ鳥は、己れの造りさる巣の中に、卵を生みて後、其上に坐り、久しくこれを暖めて、其雛を孵すものなり、

第六

三人の童子と、犬の走るを見よ、○彼等は、何の爲めに走るや、○汝は、彼等を、競走すると思ふや、○否、吾は競走するにあらずと、思へ

り、○然らば何の爲めなりや、○彼等ハ、元來跳走をること、好むものゝて、今豚の、小屋より逃げ出したるを見さる故に、之を捕へんとをるゆゑ、

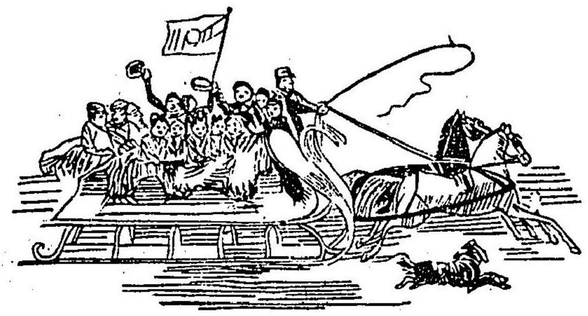
第七

爰に、童子と女兒とあり、○童子は、手ゝ、紅き石竹の一束を持ち、女兒ハ、頭髪ゝ、白き薔薇の花を挿めり、○此二人は、其石竹と、薔薇とを、何處ゝ於て、得しや、○彼等ハ、花園ゝ於て、これを得さるゆゑ、○

此等の草木は、何ゝ由りて、生長をるや、○草木は、皆、大陽の光熱と、雨露とを受け得て、生長をるものなり、故ゝ、若し、これを受くること、能をざれバ、忽ち、枯るゝものゆゑ、

第八

爰ニ來リテ見よ、○彼の馬車ニハ、幼年の男女、多く乘リて、走れり、○汝ハ、彼等の、名を知れりや、○吾ハ、之を知ル、彼等ハ、皆我學校ニ來る、生徒なり、○汝は、彼等を、何處ニ行くと、思ふや、○彼等ハ、遠方ニ行きて、遊ばんとするなり、○彼二人ハ、何故ニ、



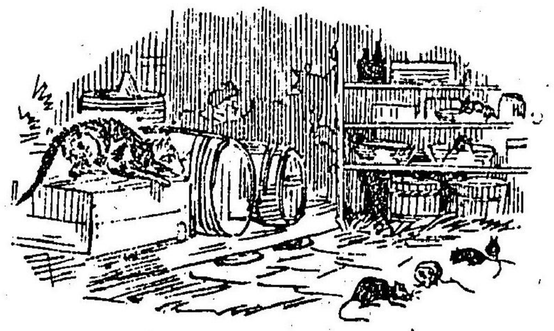
帽を脱きさるや、○彼等ハ、我親友なるゆゑ、吾を見て、帽を脱きたるなり、○吾も亦、彼等と、同遊をすることを、甚ダ好めども、彼等ハ、吾ガ病氣ニて、同遊をること、能ハざるを知りて、誘ハざりしなり、

第九

凡そ鼠は、大抵、晝間ハ、穴中ニ潛居して、出ることなし、○然れども、夜ニ至れバ、各其穴より出でゝ、暴るゝものなり、○其時は、甕ニ臨み

て、水を飲むものあり、床上を走るものあり、又、棚より上りて、食餌を索むるものあり、○然れども、若し、猫の聲を聞けば、忽ち怖れ靜まりて、其穴中より、逃げ込むものなり、

第十



來りて聞け、○汝は、此響を、箱の中なりと、思ふや、○此響を、何なりと思ふや、○鼠なりや、又猫ならずや、○吾は、其響の、甚だ小なるより、由りて、恐らく、小さき鼠なるべしと、思つり、○汝は、鼠の、此の如き聲を、聞きたることありや、○鼠は、時より、由りて、此の如き聲を、發することあり、

第十一

爰に、四人の童子あり、○其中の二人は坐りて、二人は立てり、○其傍らに腰を掛けさる、老人は、此四人に向ひて、曰ふ、汝等、若し、生涯、幸福ならんことを欲せハ、幼年の時より、總て、行を正しくし、且つ、學問を勉強

すべし、○凡そ、人の一代を、一年に譬ふれバ、年の幼きは、猶ほ春の如し、此時に、才智の種子を、腦裏に蒔くべき良期なり、能く意を注きて、此時期を怠惰に過ごすべからず、

爰に又、右の手に杖を持ち、左の手を、童子の肩に置きて、歩行せる老人あり、○此老人も、初めハ、童子にして、汝等の如く、或は走り、或は跳りて、遊びさるなり、○然れども、今ハ、眼も足も、共に、不自由になりさる故、

兒童ヨ倚りて、歩行せり、○此老人は、譬へバ、冬の時節ヨ、至りたるなり、

第十二

此人々は、小舟ヨ乘りて、湖上ヨ浮び、網を用ひて、魚を捕つゝあり、○凡て、網を湖中ヨ引くときは、其網ヨ入りたる魚ハ、大小善惡ヨ關はらゞ、皆、これを捕ふることを、得べし、○汝は、此三人と、彼等の捕へたる、數多の魚とを、見さりや、○此湖の濱へ、積み上げたる魚は、

甚ゞ多くして、善きものと、惡しきものとあり、○立ちたる、一人は、今、惡しき魚二尾を、湖中ヨ、投げ、返したり、○跪きさる人は、今、大なる、旨き魚を、壺ヨ入れんとす、○彼等は、此壺に、滿つるべき、旨き魚を、得るときハ、家ヨ持ち歸りて、互ヨ分配をするなり、

第十三

汝は、此處を、如何なる場所と、思ふや、○此處
は、數多の、美しき草木ある故に、花園なるべ
し、○汝は、左の手に鋤を持ち、右の手に帽を
持ちたる、童子を見さりや、○汝は、此童子の、側ら
に立ちさる、女兒は、手に、何を持つと思ふや、○吾
は、小さき鍬なりと思へり、
○彼等は、此美しき花園

に於て、遊ぶことを好むや、○然り、彼等は、甚
だ、之を好めり、○汝は、腋に、籠を抱きさる人
は、亦、女兒なりと思ふや、○否、彼は、家婢にし
て、瓜と茄子とを、挙き取るため、此處に來り
しなり、

第十四

爰に、又花園あり、○一人の男は、葡萄を盛り
たる籠を持てり、○童子は、今、葡萄を挙き取
る所なり、○此葡萄は、能く熟しさり、○又別

に、坐りたる一人の女と、童子とあり、○其前よ、立ちたる男ハ、女よ向ひて、談話をする狀なり、○此男ハ、手拭を冠りて、足よは、裳を着せず、又茲よ、花園を、掃除をする處の老人と、其側らに、立ちたる二人の童子とあり、○汝ハ、此老

人は、童子よ何を、話をうを、知れりや、○我ハ、これを、知れり、○老人ハ、彼等よ向ひて、曰ふ、愛すべき汝等よ、此花園の中に在る果實、又は花よ、決して觸るゝ、からぞ、吾ハ、追々に、甘き果實と、美しき花とを取りて、汝等よ、分

ち與ふるべけれバなり、

第七課

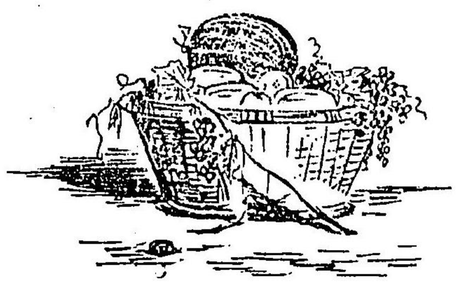
第一

大小二匹の羊あり、○汝ら羊を見ることを、好まざるや、○汝は羊の丘側より跳り走りて、遊へるを見たることありや、○吾は曾て見さることなし、○羊の毛は、猫又ら牛の毛と其性質相同しきや、

○否羊の毛は甚だ細くして、柔らなれども、猫又牛の毛ハ、然らず、○汝羊の毛ハ、何より用ひるかを、知れりや、○羊の毛は、先づ其體より剪り取り、之を晒して、糸より紡き、次より織りて、羅紗を製し、然る後裁縫して、衣服を造るものなり、

第二

爰ら果實を盛りたる籠あり、○此内ては、瓜、葡萄其他、種々の果實入れり、○其葡萄の蔓



は、籠より掛りて垂れさり、○汝た地上に映りさる葡萄蔓と、籠との影を見たりや、○汝を、今太陽を見ること能はざれども、其籠より右方より在るか、又左方より在るかを、語ることを得るや、○其影は、籠の左方より在るゆゑ、太陽は、必ず、其右方に在るなり、

第三

白き犬と、黑き犬との二匹ありて、或日、共に遊歩せり、○白き犬は、良き犬にして、少しも他物を害をることなし、○然るに、黑き犬は、惡しき犬にして、他の犬と出逢ふときは、必ず、これに向ひて怒り、又は、齒みつくなり、○此二匹の犬は、終に、大なる市街に到りて、數多の犬と、出逢ひぬ、○白き犬は、他の諸犬に、親切にして、更に、之を害をることなけれども、黑き犬は、其出逢ふ毎に、必ず、之に向ひて、

怒り吠るのみならず、終
よ、近寄りたるものよ、嚙
みつきさり、○此時數多
の男子等は、各棒或は石
を持ち來りて、黑き犬を
擊ちけるバ、二匹の敵犬
走り來りて、之を嚙み殺
し、白き犬も、亦之と共よ、殺されさり、是惡
き犬と、同道したるさめなり、

此談話ハ、獸類よ限らず、人よ於ても、相同ド
き故よ、能く心を用ひて、善き朋友を撰ぶべ
きことを、教ふるものなり、

第四

大陽の昇るを見よ、○今日
は、快き天氣なるべし、○雞
も、塒を出で、鳥ハ啼きて、樹
より樹よ遷れり、○草ハ、朝
露を帶ひ、青くして爽かふ

り、○此人等は皆農夫なり、野に行きて畑を耕し、又、穀物を苅る、○汝は、手に小さき鍬を持ちたる、童子を見さりや、○彼は、何の爲めに、野に行きさりと、思ふや、○彼も、農業を覽へる爲めに、畜犬を伴ひて、此處に來りさるなり、

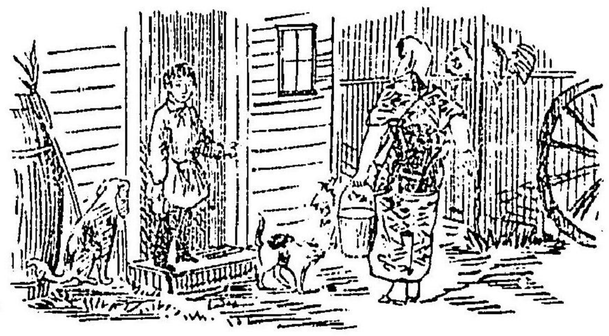
第五

今は、日中にして、甚だ熱し、○大陽の照る處は、熱けれども、樹木の蔭は、涼し、○其蔭に、坐りたる牛と、立ちたる牛と、あり、又、水を飲む爲めに、小河に入りさる牛あり、○農夫は、今、甚だ熱きを、忘れ、業を止め、家に歸りて、午飯を食そるなり、○小河に架けたる、橋あり、○汝は、其橋を見しや、○又、遠方に見ゆるは、誰の家なりと、思ふや、○これは、即ち、農家なり、○農夫は、元來、

農業は、多く、時を費やすものなり、

第六

大陽没したり、速は暗くなるべし、○農夫は、野より歸り來り、牛は、小屋に入り、雞は、塒に上れり、○此女子は、小屋に行き、牛乳を搾り、提桶に充さしめて、此處に來りたるなり、○汝は、新しき牛乳を飲むことを好めりや、○



此猫も、亦之を貰えんと欲する如く、見ゆるや、○吾は、之を飲むことを、甚だ好めり、○汝は、戸口の側らに坐する、犬を見たりや、又此犬は、何を考へ、居ると思ふや、○之は、良き犬にして、晝は、農夫の爲めに、多くの用を爲し、又、夜は、能く家を守りて、盜賊の忍ひ入る患、ふせらしむるなり、

第七

鷲は、鳥の中にて、最も勇猛にして、大膽なる

ゆゑ、鳥の王と稱せ、又、肉食して、生長するゆゑ、肉食鳥の種類より屬せり、○此鳥ハ、空中を、高く飛ひ翔りて、嶮しき岩上より、巣を造れども、食餌を求めるゑ爲めより、平地へ、下り來ることあり、○此鳥も、屢〻、鵞鴨、兎、或ハ羊等を掴み去るのゑりみならず、又、人をも、攫ミ去ることあり、○爰より、鷲が童子を攫み去らんとしたる、一話あり、○或日、二人の童子の、野より遊び居さるとき、一羽の、大なる鷲、不意より飛び來りて、其一人を攫ミ去らんとしされども、攫み外して、再び攫み去らんとせしとき、彼童子は、幸に、大ゑる鎌を、持ちたるゆゑ、其左翼の下を擊ちて、遂より、之を殺しゑ

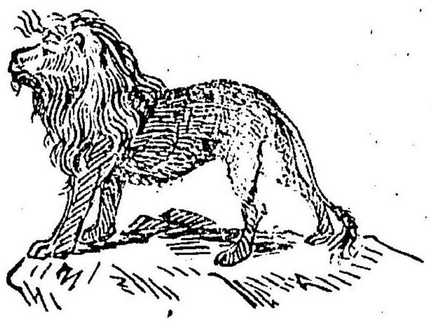
り、

第八

山羊は、其性の、暴きものと、馴れたるものとあり、○暴き山羊は、山の間に住めり、○爰に畫きたるは、皆、暴き山羊にして、其一つは、高き岩の上に立ち、他は、皆、下に居れり、○山羊は、羊と、甚だ相

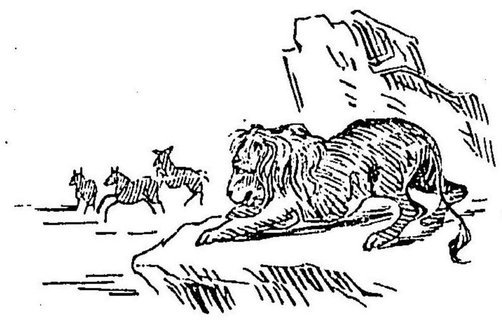
似さり、○然れども、山羊には、髭ありて、羊には、之なし、○山羊の角は、羊の角と、相同しからず、

第九



獅は、獸類中、最も勇猛なるものなれば、之を獸類の王と稱せり、其食餌を索むるに出逢ふ者は、之が爲めに害せらるべし、又其吼る聲も、實に、恐怖を

つきものゝふり、○然れども、充分、人に馴れさるものを見るときは、其甚だ勇猛なることを、想ひやるべきなり、○獅の、甚だ大にして、勇猛なるものは、亞非利加の南部に産す、○獅も、

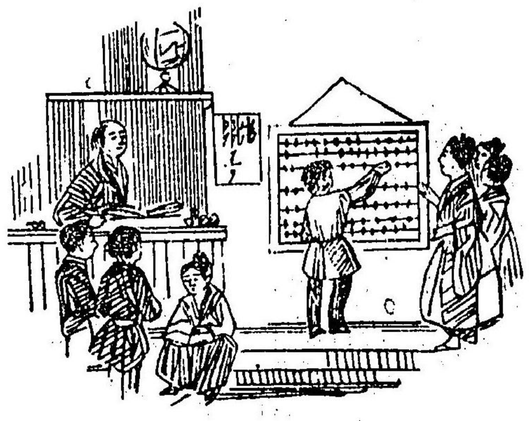


亦鷲と同じく、家畜を掠め去り、又時としては、里に來りて、人を啣へ去ることあり、○又、獅は、其食餌とすべきものゝ、近つき來るを、待つものよりて、爰に畫けるは、斑馬を捕へんため、岩石上に坐りて、之を待てる狀なり、○然れども、其斑馬は、遠所を走れるゆゑ、之を捕ふること、能はざるなり、

第十

爰に、記臆すべき、一つの昔話あり、○或る二三人の惡少年、一日、數多の蛙の住める、池の邊に立てり、○此蛙等は、少年等に向ひて、更に害を爲さゞれども、少年等は、一匹の蛙の、

頭を水上ゟ出をを見て、直ちに、石を擲ちたり、○此時、其蛙は、少年等ゟ向ひて曰ふ、貴君等、其石を擲つことは、假令、慰樂なるべけをども、我の爲めゟは、一命ゟ關はることゝふるを、思をざるやと、此昔話は、我ゟ向ひて、害を爲さゞるものには、我よりも、亦、害を爲をへからゞ、又他人の、悲痛、困難を見て、悅ひ笑ふ如きは、決して、爲をべからざることゝふるを、教へしものなり、



第十一

汝は、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、二十、三十、等と、物を數ふることを得るや、○吾、若し、汝ゟ、十個の林檎を與へ、彼も亦、六個の林檎を與ふる

ならば、汝ハ、總計、幾何を得さりと謂ふや、○汝ハ、十六個の林檎を得たりと謂ふ、ふるべし、○汝ハ、此の如く、物を數ふることを學ぜさるべからず、汝は、石盤、又は紙上又、一、二、三より、百、千、萬億ま至る迄の、數字を、書くことを、知れりや、○若し、書くこと能ハざれバ、又、之を學ハざるべからず、

第十二

駱駝ハ、大なる沙漠の在る、地方ま於ては、甚だ要用ふる、動物ぬして、此沙漠即ち沙海を旅行そるとき、用ひるゆ糸、或は、之を沙漠の舟と云ふ、○駱駝は、頸長く、頭小さく、脚長く、

跖廣く、軀體剛くして、其背部ま、二腦あるものと、一腦あるものとあり、

駱駝ハ、重き荷物を負ひ、數日の間、水を飲まずして、乾燥したる沙漠中を、

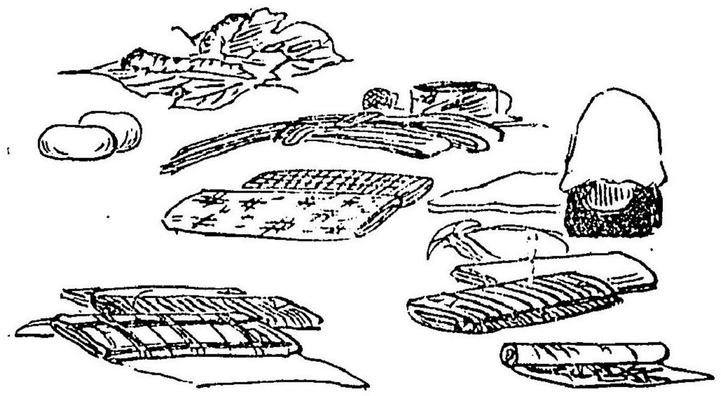
毎日、十二三里、又は、十七八里、旅行し得るものゝ、ふして、若し之に荷物を負たしめ、又、之を御さんとするときは、跪きて、之を爲さしむ、此動物は、沙漠地方の、人民に、種々の用を、爲すものにして、荷物を負たしむるの外に、其肉と乳とは、食物を爲し、毛は、織りて、羅紗を製することを、得るなり、

第十三

爰に、二つの圖あり、皆農夫の爲せる業を、示

せるものなり、○初めの圖は、農夫の、野に出で、畑を、耘り、又、種を蒔く狀にして、次きの圖は、熟したるものを、刈り取り、之を束ねて、家に持ち運ふ所なり、○汝は、意を注きて、彼等の、働く狀を、見るときは、如何ふる感を、起すや、○我も、亦彼等の

如く、其本業を、勉めざるべからざると、思ふなり、



第十四

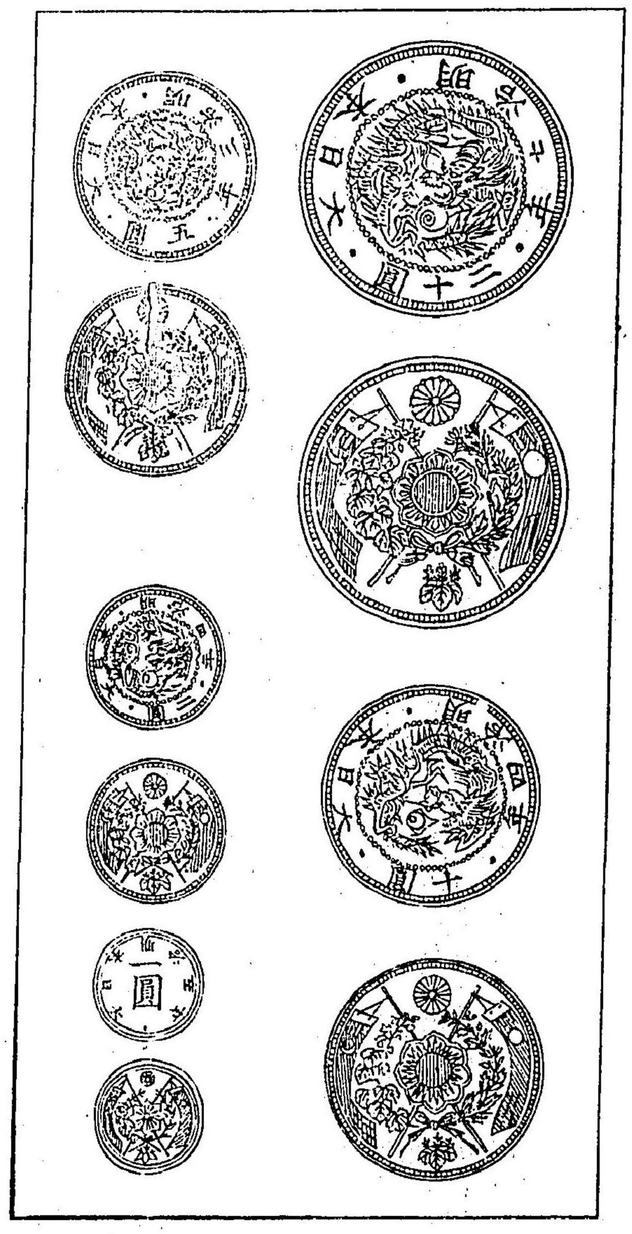
汝ハ、衣服と爲すべき品物ハ、何より製するかを、知まりや、○吾は、之を知れり、○草綿より製する者と、麻より造る者と、蠶より作る者とあり、○汝は、夏と冬とに於て、如何なる色の衣服を、着ることを、好めりや、○吾は、夏ハ白き色、冬は他の色の衣服を、着ることを、好めり、○白き色のものハ、涼くして、他の色のものは、暖なれバなり、

第十五

凡そ貨幣ハ、各人の、所有すべきもの〻中、最も必要の物にして、若し、之なければ、家屋、食物、衣服、其他、種々の物品を、得ること能ハざ、

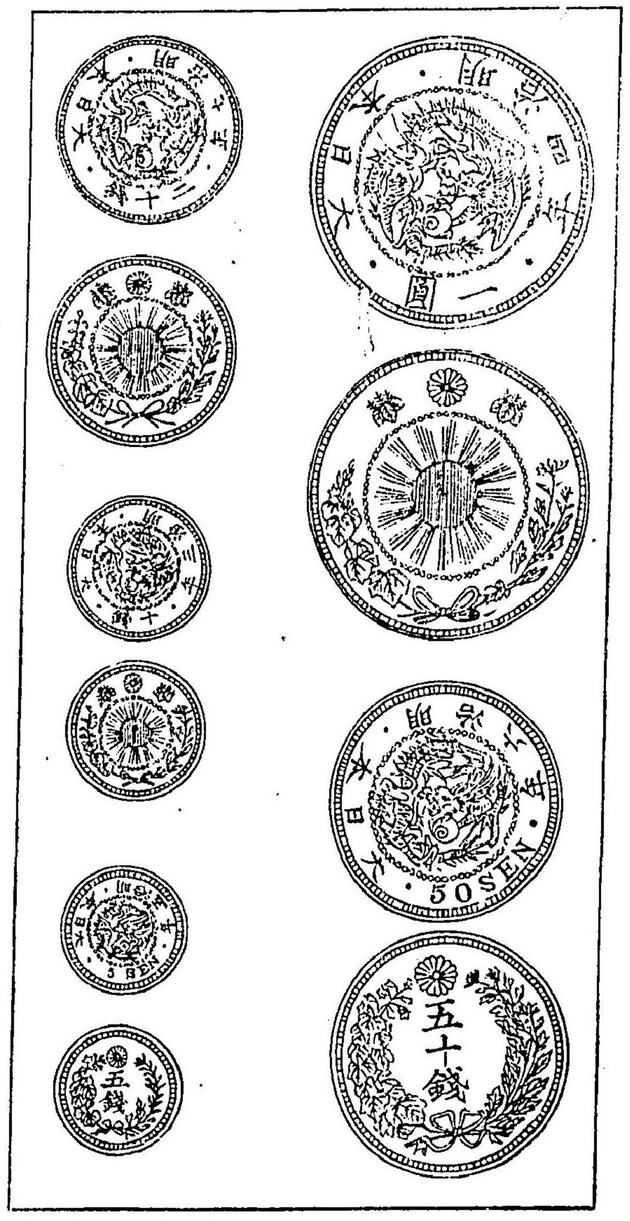
○爰ゝ、種々の貨幣あり、先づ、其價格を知り、又、其算へ方を、知らさるべからゞ、○貨幣に、三類あり、其黄金ゝて造れる者を、金貨と云ひ、銀ゝて造れる者を、銀貨と云ひ、銅ゝて造れる者を、銅貨と云ふ、

金貨ゝ五種あり、即ち二十圓、十圓、五、圓二圓一圓ゝして、其表裏の模様と、大小の比例とは、左の如し、



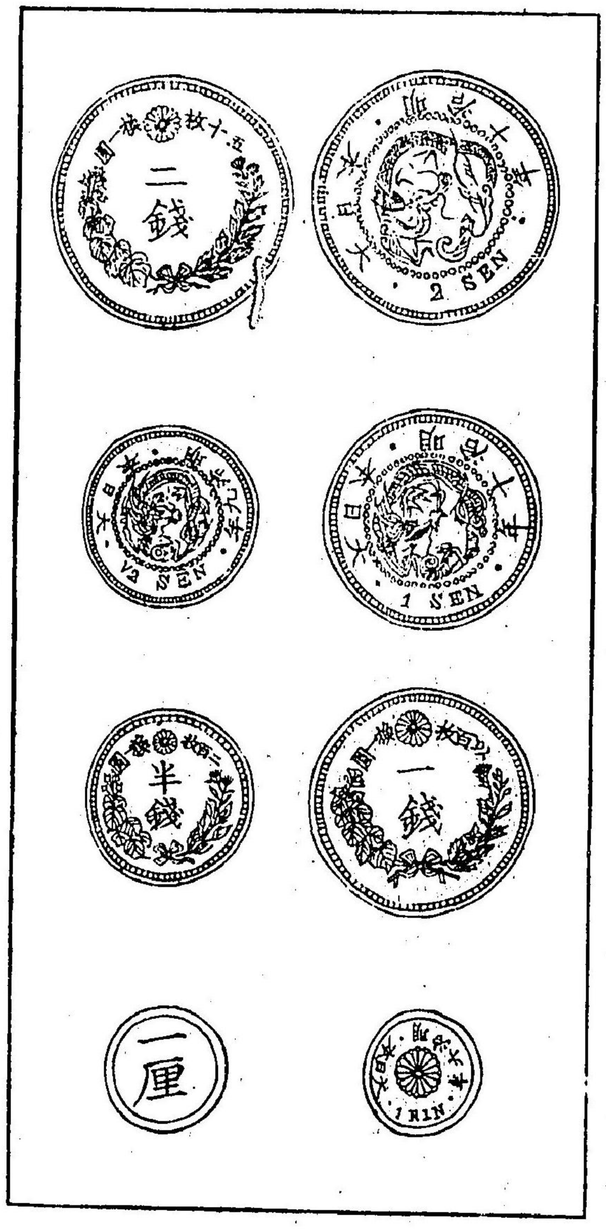
銀貨も亦五種あり、即ち一圓五十錢、二十錢、十錢、五錢ゝして、其表裏の模様と、大小の比

例とは左の如し



銅貨は四種あり、即ち二錢、一錢、五厘、一厘は

して、其表裏の模様と、大小の比例とは、左の如し、



右十四種の貨幣の中、一厘の銅貨十個は、一

錢と同じく、其百個は、十錢に同じく、其千個は、一圓に同じ○又、五厘の銅貨十個は、五錢と同じく、其百個は、五十錢と同じく、其千個も、五圓と同じ、○又、一錢の銅貨十個は、十錢に同じく、其百個は、一圓と同じく、其千個は、十圓と同じ、○又、二錢の銅貨十個は、二十錢と同じく、其百個も、二圓と同じく、其千個も、二十圓に同じ、

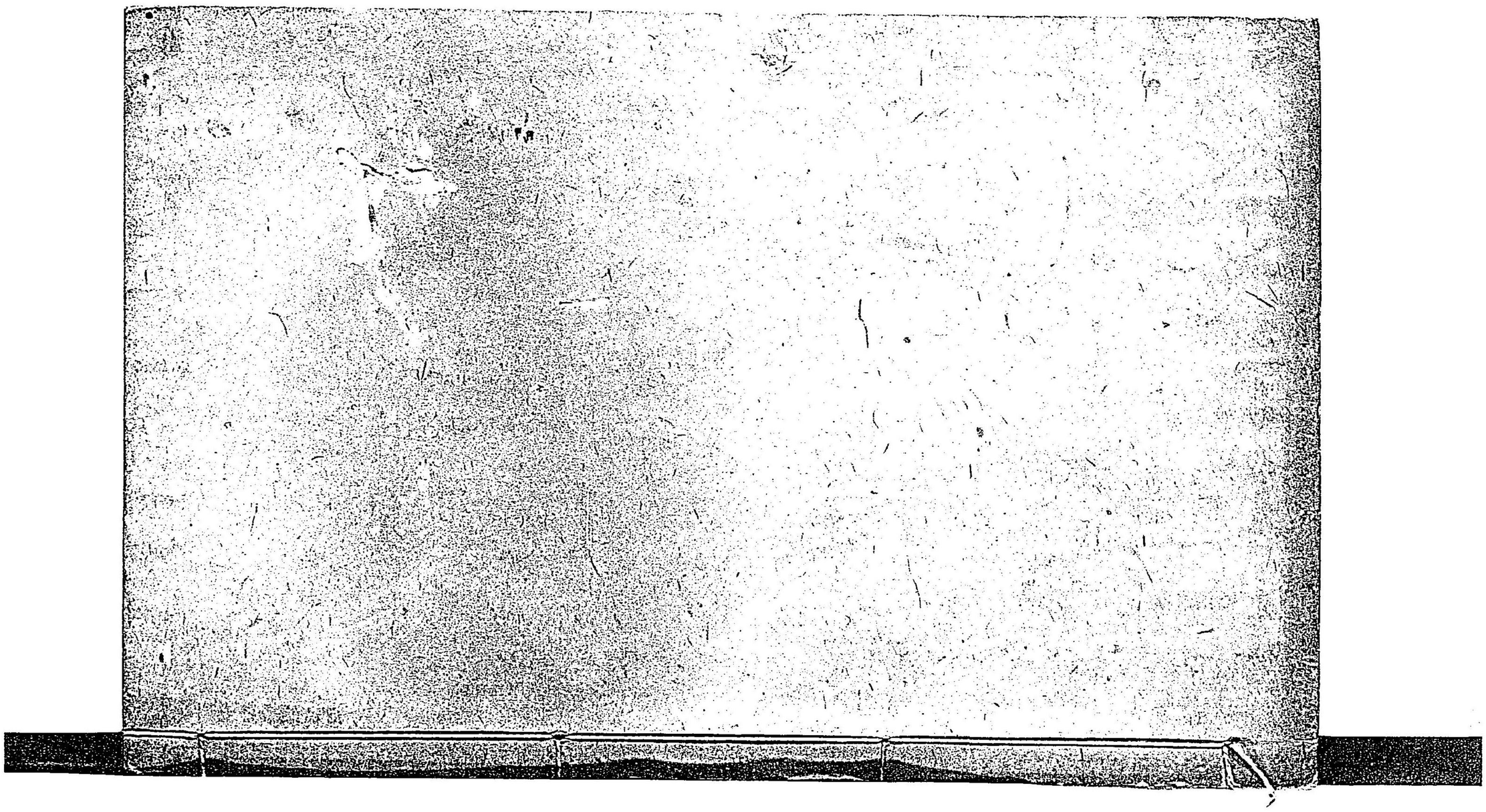
故と、銀貨の最大なる者は、一厘の銅貨の千個、五厘の銅貨の二百個、一錢の銅貨の百個、二錢の銅貨の五十個と同じ、○又、金貨の最大なる者は、一厘の銅貨の二萬個、五厘の銅貨の四千個、一錢の銅貨の二千個、二錢の銅貨の一千個と同じ、

右の貨幣は明治三年以來の、發行として、當時通用せる者なり、○其他、幕府時代の、貨幣にして、今尚ほ、通用する者、四種あり、即ち八厘、二厘、一厘五毛、一厘の錢是なり、

小學讀本卷之三終

明治十五年五月廿九日版權免許
同　年九月出版

定價拾貳錢

纂譯人　東京府士族　宇田川準一
東京西小川町二丁目七番地

出版　文學社
東京馬喰町二丁目一番地